

2010年度 第2回日本語教育巡回研修会
2010.8.24-26

自律学習能力の育成を図る教室活動
—モニタリングと自己評価の基準確立を目指して—

ワークショップ1

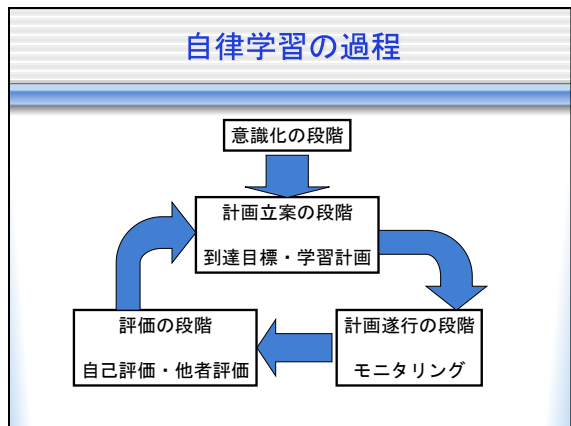
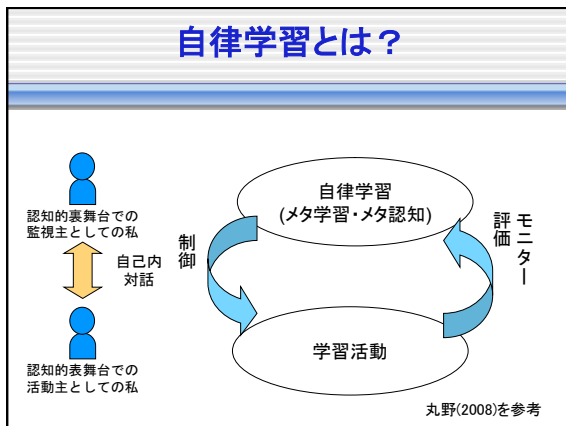
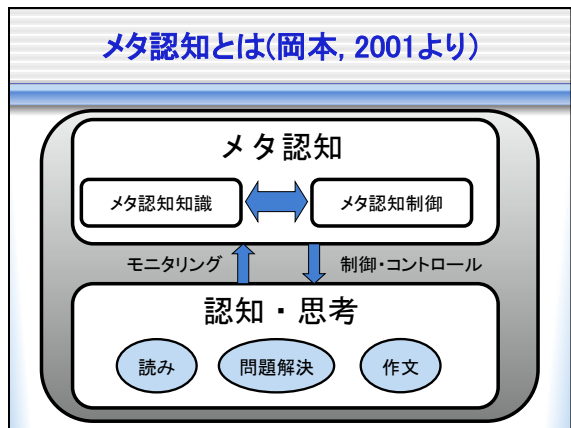
衣川隆生
(名古屋大学留学生センター)

自律学習とは何？

- 自律学習・自己調整学習・自己制御学習
- 学習者オートノミー
- B.ジーマン&D.シヤンク(編)(2006)『自己調整学習の理論』
 - オペラント的見方
 - 現象学的見方
 - 情報処理的見方
 - 社会認知的見方
 - ヴィゴツキー派の見方etc(7つの諸理論)
- 「私」という「個」が実践を通して「今ここで」認識している「自律学習」についての概要

自律学習能力・学習者オートノミー

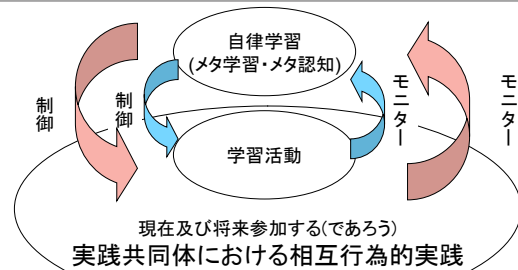
- 自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価できる能力(青木,2005:773-774)
- 「自身」の「学習活動」を第三者的な視点で「モニターし制御する活動」
- メタ学習
- メタ認知



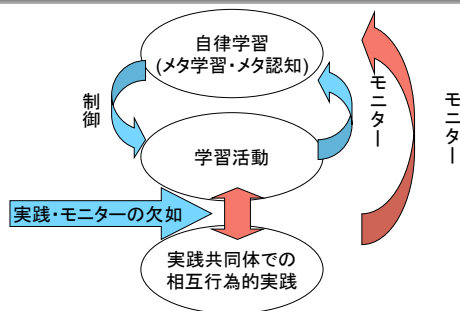
自律学習を支える下位能力

- 1) 学習者が学習経験や学習環境、自身の言語能力や学習ニーズなど学習に関わる様々な要因を客観的な視点から意識化する能力
- 2) 意識化によって得られた情報をもとに具体的で実現可能な形で到達目標と学習計画を立案する能力
- 3) 学習計画を遂行し、その遂行状況を第三者的な視点でモニターする能力
- 4) 学習結果の評価を行い、その評価結果に基づいて到達目標や学習計画をより効果的で実行可能なものに変えていく能力

なぜ具体的・個別的な意識化が困難なのか



なぜ具体的・個別的な意識化が困難なのか



「意識化」の適切性条件

- 1) 言語環境、レディネス、ニーズ等の学習要因の表象が学習者の参加している実践共同体の中でのポジションや位置づけに基づいていること。
- 2) 目標の表象は学習者が参加している実践共同体の有能な成員になるためのものであること。同時に学期終了時に到達可能な最近接発達領域 (zone of proximal development、以下ZPD)に含まれるものであり、具体的で自己評価、及び他者評価が可能な表象であること。
- 3) 計画の表象は目標との対応関係が密接なものであること。同時に計画を実行したかどうか、実行した場合の効果測定が可能な表象であること。

課題

- 「ニーズ分析」では適切な意識化は不可能に近い。
- 田中・斉藤(1993)
 - ◆ 意識化はあくまで学習をしている過程で体験的に行うべき
- → 時間的制約の多いコースの運営過程で自らの学習動機、到達目標、それを達成するための学習計画などを体験的に意識化していくにはどのような活動が有効なのか

能力をどう考えるか

伝達能力

(communicative competence)

文脈や状況と切り離れた個人内に獲得、蓄積された知識や技能をとらえる静的で個人主義的な能力 (日本語教育学会, 2007)

習得メタファー

(義永, 2005)

相互行為能力

(interactional competence)

社会の具体的な状況において他者との関係性の中で発現する動的な能力 (日本語教育学会, 2007)

参加メタファー

(義永, 2005)

相互行為能力

到達目標

- ★目標言語を用いる共同体の有能な成員になること
 - ★具体的・個別的・状況依存的
- ☞ 共同体の実践に、より経験豊富な他者と共に参加することによって習得される。
- ★ 相互行為の実践(義永,2005)

実践例1 模擬面接(衣川, 2006;2008)

- 「このクラスの受講動機と到達目標、学習計画を説明する」という模擬面接＝**第一の外言化**
- →具体的・実現可能、かつクラスの内容に適応した到達目標と学習計画を立案する
- 面接で述べた学習計画についての経過報告(何をやって、その効果はどうだったか)を毎週メーリングリストで報告する。＝**第二の外言化**
- →計画遂行の段階・評価の段階を繰り返すことにより、学習要因の表象を精緻化していく。

外言化・文章化は何をもたらすか

- 外言化(ヴィゴツキー, 2001)
 - 知識を単に記憶するだけの死んだ知識にせず、適用できる生きた知識にするためには、その知識を自分の言葉で説明してみることが重要。
- 文章化・言語化の効果(内田, 1990, p. 84)
 - ことばによってつながりを考えているうちに、無関係なものが関係づけられたり、表現を探す以前には気づかなかったことに気づく。
 - 書く以前には見えなかったことがことばの力を借りてはつきりと(する)。
- 茂呂(1988, p. 159)
 - われわれはわれわれ自身の声を作るために書くのだ

授業予定

月日	題目	課題
12月12日	オリエンテーション 自己診断と目標設定	面接(1回目)準備
12月19日	面接(1回目)	自己評価 他者評価 学習経過報告
1月16日	面接(1回目)フィードバック	面接(2回目)準備 学習経過報告
1月23日	面接(2回目)	自己評価 他者評価 学習経過報告

1回目の模擬面接

- (動機)
 - 卒業論文・社会人になるための面接
- (目標)
 - 学習発表表についての注意点、たとえば、文体、用語の統一、発音、話すスピード、視線などを基礎として、理解し応用できる能力を身につけるようにと思っています。
- (計画)
 - ただ常に自分の目標を意識しながら、日々過ごせるようにするとよいと思っています。

評価・コメント

- ピア
 - 動機と目標は聞きやすかったけど計画はメモできなかった
- 教師
 - 目標というのは、何がどのぐらいできるようになりたいかを述べる必要がある。この計画では自分自身も教師もその計画が実施できたかどうかをチェックできない
 - 目標と計画が明確には意識されていなかった

2回目の模擬面接

- (目標)
 - ◆ これからは、発音を中心に勉強したいと思っています。あと、アカデミック日本語は書き言葉が要求されているのでこの面については、できれば精進していきたいと思っています。
- (計画)
 - ◆ 発音については、先週先生がおっしゃった方法(=シャドーイング)を実行したいと思っています。そして、面接員の役をして、面接員の立場から面接を受けた人に何を期待しているのか分かって来ました。ですから、面接員が期待していることを話した方がいいと思います。そして、書き言葉については、文章を発表するとき、何か、これから注意した方がいいと思います。

評価・コメント

- ピア
 - ◆ 「計画の最後のポイントはあまりわからなかった」「いつから計画に入ったのかわからなかった」
- 自己評価
 - ◆ 「面接員だったら、不合格にする。特に計画のところは、面接員に計画的な人ではないという印象が残っているかもしれない。」
 - 1回目の面接よりは意識化が進んだものの、まだ到達目標と学習計画は明確には意識されていない

学習経過報告

- 自分の発表を見て、今まで自分が①気づけなかった癖がよくわかった。特に自分の話すスピードとアクセントがよくわかった。以前は自分は発音がちゃんとしっかりしている気がする。初めて自分のビデオを見ると、えっ、②私の日本語の発音はこうなっているのを感じていた。だから、ちょっと③自分にもこれから発音に力を入れなければならない。
- Aさんから話のリズムを注意されました。先生も「めりはり」という言葉を使いました。いままで中国で先生から「日本語は平穩な言語で英語と中国語と違って、強い感情を入れないで、めりはりは強くないでください」といわれたことがあります。ですから、今まで、④「めりはり」という標準はまだ把握していません。この発音について、これから⑤テレビを見るとき、友達と話すときなどに注意しようと思っています。

学習経過報告

- 私は発音の点でがんばっています。暇だったら、いつもテレビを見ています。なぜかという、聴解にとってもいい。その上、⑥話し方など、次第にわかると思っています。これが発音にとっても重要だと思います。
- 今週の計画はわかりやすい発表を目標として、まず、⑦話すスピードとセンテンスのどこでポーズを取るかに練習しました。⑧効果は(今週の発表で)多分少し出たと感じます。
- ⑨意識しながら助詞に強くないと努力しています。⑩効果は期待しています。

参考文献

- 青木直子(2005)「自律学習」日本語教育学会(編)『新版日本語教育事典』大修館書店、pp.773-775
- 内田伸子(1990)『子どもの文章-書くこと-考えること』東京大学出版
- ヴィゴツキー、L. S. (2001)「新訳版-思考と言語(柴田義松(訳))」新読書社
- 岡本真彦(2001)「メタ認知-思考を制御・修正する心の動き」『認知心理学を語る第3巻おもしろ思考のラボラトリー』北大路書房、p.139-159.
- 衣川隆生(2008)「自律学習能力の顕在化を目指したコース運営-模擬面接と学習経過報告を通して-」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第16号、p.79-97.
- B.ジーマン&D.シャック(編)(2006)『自己調整学習の理論』北大路書房

参考文献

- 田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際-学習支援システムの開発-』大修館
- 日本語教育学会(編)(2008)平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発-報告書-』
- 丸野俊一(2008)「心を司る「内なる目」としてのメタ認知」『現代のエスプリ「内なる目」としてのメタ認知』No.497、p.5-17.
- 茂呂雄二(1988)『なぜ人は書くのか』(認知科学選書16)東京大学出版
- 義永(大平)未央子(2005)「伝達能力を見直す」西口光一(編)『文化と歴史の中の学習と学習者』凡人社、p.54-78.